

# みんなのために、自分にできることは…

## 黄金色の稲穂

### 中津野用水路をつくった少女「水口ゆきえ」

今から二百五十年ほど前のこと。別府川の上流に位置する中津野は、川より高い土地にあるため、水田に十分な水を引くことができなかった。そのため、人々は思うように米が作れず、豊かに暮らすことができていなかった。

「中津野の水田に水を引くにはどうすればよいだろう。」

中津野に生まれ、その土地の人たちの厳しい暮らしを見て育った十五歳のゆきえは、用水路をつくり、米作りをさかんにすること、ふるさとを豊かにできないだろうか、日夜そればかりを考えていた。

ある春の日のこと。ゆきえは山田川を見下ろす女生嶽（によしゆだけ）という山に登った。この山の頂上からは、山田、蒲生、帖佐、重富など四方の様子が手に取るように見えるのだ。しばらく景色を見わたしていたゆきえは、あることを思いついた。

「そうだ、上流にある山田のあたりで川をせき止め、用水路を掘っていけば、川よりも高い土地にある中津野にも水が引ける。田んぼができて米がとれば、ふるさとにはぎっと豊かになるにちがいない。」

山を下りるゆきえの目は、明るい希望と強い決意で、きらきらと輝いていた。それからというもの、ゆきえは毎日、村のおとなの人たちを説得してまわった。はじめは、子どもも言うことだからと相手にしなかった人たちも、思いを込めて語るゆきえの熱意にうたれ、しだいにその話に耳をかたむけてくれるようになった。そして、とうとう用水路つくりの計画は実行されることになったのだ。

人々は、力を合わせて工事を始めた。まず、山田川をせき止め、水を流しこむために、山下井せきがつくられた。そして、そこから中津野までの長い用水路が掘り進められていった。

しかし、その当時は、ショベルカーや削岩機などの便利で強力な機械はなかった。人の力だけが頼りのたいへんな作業だった。しかも、用水路を掘る道筋には小さな山や丘などが多く、岩をくりぬいてトンネルを通さなければならぬ場所が、九つもあった。

「いつまでこんな苦しい作業が続くのだろう。」

「本当に用水路は完成するのか。」

あまりの難工事に人々は次第に不満や疑問を持つようになった。そして、工事が半ばをすぎたころには、農繁期が重なったこともあり、協力してくれる人たちは一人二人と減り、とうとうゆきえがただ一人になってしまった。

ゆきえは孤独に耐えながら、手に血をにじませ、たった一人で工事を続けた。そうした、ゆきえのひたむきな姿に、一時は工事を離れた人々も心を打たれ、道具を手に取り、再びゆきえと用水路を掘り始めた。

「水だ。用水路を水が流れて来たぞ。」

宝暦（ほうれき）二年（一七五二年）、幅約一・八メートル、全長四キロメートルの中津野用水路は、ついに完成した。この用水路が運ぶ待望の水によって、山田・中津野に合わせて六十六ヘクタールもの水田が新たに拓かれたのだ。

感動の声が、どっと上がった。笑顔の輪が広がった。ゆきえと共に多くの苦難を乗り越えた人々は、お互いに手をにぎり合い、喜び合った。勢いよく流れる用水路の水、そして、ふるさとの人々の笑顔。

「これで田に水が引ける。ふるさとのくらしは豊かになる。」

黄金色の稲穂が広がる美しい光景を思い浮かべながら、ゆきえはそっと涙を流すのだった。

昭和二十六年（一九五一年）、山田村の人びとは、水口ゆきえの功績をたたえるために記念碑をつくることを村議会で議決した。そして、山下井せきの近くに立派な石碑を建てた。

今でも、ゆきえに感謝する人々たちによって記念碑はいつもきれいに清掃され、手向けられる花が絶えることはない。

（原案） 始良市立山田小学校 西田哲郎教諭



中津野用水路の場所



水口ゆきえ



山田山下井せき



トンネルに残る道具のあと



ゆきえの記念碑